

Alternative Systems Study Bulletin

第20巻第1号

(2012年4月16日)

ハーヴェイ『資本の謎』によせて 岩田弘さんの新しい Kommunismus 論 大阪自由大学資本論講座記録(第1回)

現代の問題意識から『資本論』を読み解く ①ソ連崩壊と『資本論』

ソ連崩壊までの歴史的経過と評価

資本論初版価値形態論の意義とソ連崩壊の原理的根拠

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

ハーヴェイ『資本の謎』によせて

資本主義の根本的変革の運動提案への補足として

(解題) この論文は『情況』誌5・6月号に寄稿したものです。

はじめに

ハーヴェイの新著『資本の謎』(作品社)は、金融危機や恐慌について論じているが、しかし単にその分析にとどまらず、恐慌を不可避とする資本主義を如何にして打倒するのか、という問題に正面から立ち向かった好著である。もちろん既成の回答が用意されているわけではないが、前著『新自由主義』(作品社)よりもはるかにラディカルな運動論が展開されており、さらに「何をなすべきか?誰がなすべきか?」という最終章(第8章)では「新しい反資本主義運動に向けて」の提言もなされている。この章でハーヴェイは「共産主義」という言葉が、ソ連の崩壊とともに死亡させられてしまっているとはいえ(特にアメリカでは)、今日事実上の共産主義者が何百万人も活動していることを踏まえ、その運動に反資本主義運動と名づけた上で、資本主義の根本的変革の必要性を理解した「新しい反資本主義運動」の展開を認知し、期待し、それを育てあげようとしているのだ。

「このことの政治的必然性を理解するためには、まずもって、資本の謎(エニグマ)を解き明かさなければならない。いったんその仮面が剥がされ、その神秘性が暴かれたならば、何をなすべきか、なぜなすべきなのか、どのように開始すべきなのかをより容易に理解することができるだろう。資本主義はひとりで崩壊することはない。それは打倒されなければならない。資本家階級は決してその権力を自ら進んで放棄したりしない。それは奪い取らなければならない。」(『資本の謎』、以下引用は全て同書、322頁)

ハーヴェイのこの書は文字通り、資本のエニグマを解き明かすことをめざして書かれている。「エニグマ」とは謎という意味ではあるが、もともとは第2次大戦中にナチスが使用した暗号機の名称である。ナチスのV型ロケット弾によってロンドンをはじめとする都市を攻撃されたイギリス人にとって、エニグマという言葉にはある種の思い入れがあるのだろう。ハーヴェイは資本をエニグマにたとえることで、資本を敵の暗号と捉えてその解読を試みているとわいていだろう。なお、連合軍はエニグマの解読に成功したが、ナチスはそれを知らずに使い続けていたという落ちがある。

ハーヴェイは資本という敵の暗号の一定の解読の上に立って「新しい反資本主義運動」を提案しているのだが、今回は、金融危機や恐慌の分析ではなく、新しい反資本主義運動についてのハーヴェイの理解へのコメントを行ってみたい。

あらかじめ問題意識を書いておくと、ハーヴェイの提起が成功するためには幾つかの欠落部分が目についている。具体的には、価値形態論(ハーヴェイは、『資本論入門』を書きながら、価値形態論はちゃんと解読していない)、信用論(信用制度については言及しているが、利子生み資本についての原理的分析はなされていない)、ソ連論(これについても取り上げられているが平板である)である。今回価値形態論とソ連論の欠落については補足することができたが、信用論については果たせてはいない。しかし、ハーヴェイも言及しているレント論との関連で見れば、利子生み資本の本性の解明は緊急の課題である。この課題は、『情況』第4期、3・4合併号に寄稿した「オペ

ライズモの金融危機論の批判」でも少し触れたが、利子のつかないマネーの可能性と関連している。実際に、地代や利子のない資本主義は可能である。本稿で触れたように、商品や貨幣が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって生成されているのに対して、資本主義の下での地代や利子は法的契約関係によって本源的に発生しているものだ。レント論を論じるならば、地代と利子の廃止という問題提起とセットとされるべきであろうが、これについては次の課題としたい。

1. ハーヴェイのソ連論(古いオルタナティブ)

第8章の冒頭は「古いオルタナティブから新しいオルタナティブへ」というタイトルで、既成の共産主義(ソヴィエトブロック)崩壊の教訓から論を起している。

「共産主義は、資本主義とはまったく異なる財とサービスの生産・分配様式を作り出すことによって資本主義に取って代わろうとした。現実存在した共産主義の歴史において、生産、交換、分配に対する社会的統制は、国家統制と制度的な国家計画化を意味した。結局のところ、この試みは失敗に終わったのだが——その理由についてはここで詳述することはできない——、中国におけるその変形(およびシンガポールなどでのその初期の適用例)は、成長をもたらす上で、純粋に新自由主義的モデルよりもはるかに有効であることが明らかになった。共産主義的仮説を復活させようとする今日の試みはたいてい、国家統制を拒絶し、生産と分配を組織するための基礎として、市場の力と資本蓄積に取って代わる別の形態の集団的な社会的組織を追求している。垂直的な指令システムではなく、水平的なネットワーク型システム——自律的に組織された自己統制的な生産者と消費者の集合体同士のネットワーク——が、新しい形態の共産主義の中核に座ることが構想されている。現代の通信技術はこのようなシステムを実現可能なものになっている。世界中で、このような経済的・政治的形態を構築するさまざまな小規模実験がなされている。この点では、マルクス主義的伝統と無政府主義的伝統の間に一定の収斂が生じている。」(279~80頁)

ハーヴェイの新しい反資本主義運動とは事実上の共産主義運動であり、したがって、新たな共産主義運動を提案するに当たって、ソ連崩壊の総括から始めることは非常にオーソソックスなやり方である。ハーヴェイは詳述できないと断った上ではあるが、ソ連が国家統制と制度的な国家計画化によって共産主義社会を建設しようとしたことの失敗を示した上で、中国やシンガポールのモデルは新自由主義よりも成長をもたらす上で有効であることを確認しつつ、今日の共産主義的仮説が、国家統制を拒絶した上で、市場と資本蓄積に代わる、生産と分配を組織するための集団的な社会的組織の追求に向かい、そしてそれはネットワーク型システムとして構想されているが、それは現代の通信技術によって可能となっており、そして世界中で小規模な実験がなされつつあることが指摘されている。

ところでハーヴェイはソ連の失敗については、資本主義発展の共進化という観点から総括している。資本主義発展の共進化とはハーヴェイがこの書で提起するアイデアだが、それは、資本主義的進化について、その空間的編成と地理的ダイナミズム、さらにその環境的制約といった諸問題を脇に置いた上で、資本が活動する多様で相互に関連した領域についての考察にもとづいて導出されている。

「以上のように考えることによって、資本主義の進化の軌跡の内部に、七つの『活動領域』を識別することができるだろう。技術と組織形態、社会的諸関係、社会的・行政的諸制度、生産と労働過程、自然との関係、日常生活と種の再生産、『世界に関す

る精神的諸観念』である。これらの領域はどれ一つとして、支配的ではないが、その他のものから独立してもない。かといって、それらはいずれも、他のすべてによって——たとえ集合的にであれ——決定されているわけでもない。それぞれの領域は独自に進化するが、常にその他の領域との動的な相互作用のうちにある。」(158頁)

ハーヴェイはこの七つの活動領域について、どれかが他を支配したりすると見ることなく、「それらを資本主義の長い歴史の中で集合的に共-存在し共進化するものとして考察しよう。」(159頁)という立場を表明している。そしてこのようなアイデアにもとづいて、ソ連の失敗を考察している。

「おそらく、社会主義を構築しようとした過去の試みの最大の失敗の一つは、これらのすべての領域を横断して政治的に関与することに消極的であったことであり、領域間の弁証法を通じてさまざまな可能性を切り開こうとせず、むしろそれらの可能性を閉じてしまったことである。革命的共産主義、とくにソヴィエト連邦のそれは、1920年代の革命的実践の時期がスターリンによって終止符を打たれた後はとりわけそうなのだが、領域間の諸関係の弁証法を、あまりにしばしば、生産力(技術)を変化の前衛に位置づける単線的な計画へと還元してしまった。このアプローチは必然的に失敗した。それは、停滞状態、沈滞した行政的・社会的諸制度へと行きつき、日常生活を単調なものにし、新しい社会的諸関係や精神的諸観念を探索する可能性を凍結させた。それはまた、自然との関係にしかるべき配慮をしなかったことで悲惨な結果をもたらした。」(173~4頁)

七つの領域への目配りの欠如は、生産力を社会変革の主動因と位置づけたことの帰結だが、しかし、当時のソ連でそのような目配りが可能であったかどうかという問題が残る。ただ、ハーヴェイが国家権力奪取それ自体の限界性について次のように述べているのは正当であろう。

「しかし、先に論じたように、国家権力の単なる獲得によっては真の社会主義ないし共産主義革命をなしえない。共進化するシステム内部の他のすべての活動領域が何らかの形で連動して動く場合にのみ、資本主義的支配とは大きく異なった全面的な革命的変革について語るができるのである。これは、一部の人が現在論じているのとは違って、国家権力が時代遅れだとか、変革の政治力学の主要な場をもっぱら市民社会と日常生活に移行させなければならないということではない。」(258頁)

簡単にまとめれば、ソ連で国家権力を獲得し、国家統制と計画経済で社会的統制を行い、生産力第一主義で社会変革を試み、それが七つの領域間の共進化に目配りしないことによって、ソ連が崩壊したということだが、このハーヴェイの総括に付け加えるべき点がある。それは、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるものであるがゆえに、政治的、法律的、行政的な意志の力では、この本能的共同行為を廃絶できないという問題である。この理解は『資本論』の初版の価値形態論と交換過程論の解釈によって理論的に明確になるのだが、残念ながらハーヴェイは、『資本論入門』という著作を書きながらも価値形態論については注目してはいない。私はこの問題をソ連崩壊の根本的根拠だと考えており、さらには、資本という敵の暗号の根本的解釈作業と考えるのだが、ここではこの点の指摘にとどめ、先のようなソ連崩壊の総括を踏まえて、ハーヴェイが今日の事実上の共産主義運動の多様な展開とその根拠について分析している諸点に立ち入って、私の観点からの補いをしようと思う。

この補いは、「さまざまな領域の周囲に編成された一連の社会的諸勢力間の同盟を構

想することが至上命令となる。」(176頁)と考えているハーヴェイの提起への応答であり、ハーヴェイの労作への敬意の表明である。

2. 新しいオルタナティブ

長い揺籃期を経て、根本的な改革の必要性が浮かび上がる、このようなスタンスでハーヴェイは新しいオルタナティブについて論じている。

「確定的なことは何も言えないとはいえ、われわれは現在、長期にわたる再編がようやく開始される地点にいるのかもしれない。それは壮大で射程の長いオルタナティブが世界のあちこちでしだいに表面化してくる時期である。不安定さが長引けば長引くほど、悲惨さが長期化すればするほど、ビジネスを行う既存の方法の正当性はますます疑問視されるようになり、異なった形で社会を建設したいという要求はしだいに高まっていくだろう。金融システムに応急措置を施す彌縫策的な改良ではなく、抜本的な改革がいつそう必要になってくるだろう。」(280頁)

資本主義の根底をなしている商品・貨幣関係が、国家権力の意志の力では廃絶できないということが判明すれば、この長い揺籃期についてもハーヴェイとは異なる見通しが見えてくる。つまり抜本的改革とは、資本主義の廃絶であり、具体的には商品・貨幣・資本の廃絶なのだが、このこと自体が、直接的な実践的課題としては登場しえないという問題が明らかとなる。というのも、少なくとも商品・貨幣の廃絶のためには、意志の力によらないとすれば、迂回して、無意識のうちでの本能的な共同行為を無用とするような経済的関係をつくり出すことが問われているからだ。そしてこの迂回実践は、必ずしも資本主義の廃絶という目的意識によってなされているとは限らないからだ。

ハーヴェイも批判しているように古い共産主義が、七つの領域の横断ができていなかったということだが、この克服は政治運動を政治的意思の統一として組織する従来のやり方では如何ともしがたいように思われる。つまり七つの領域の横断は、ベクトルの合力では不可能で、存在そのものの重力を拾い上げる磁場のような場所において可能となるからだ。そしてこの磁場の形成は政治的意思統一での組織化にはなじまない。異なった形での社会の建設という課題自体、そのような目的意識性で取り組まれるとは限らないのだ。しかし、ハーヴェイはこのような状況についてあまり意識していないようで、次のように述べている。

「中心となる問題は、全体として、資本家階級の再生産とその権力の永続化に世界的規模での確に挑戦しうるような、堅固で十分統一された反資本主義運動が存在しないことである。資本主義的エリートたちの特権の砦を攻撃したり彼らの法外な貨幣権力と軍事力を抑制するための何らかの明白な方法も見出されてはいない。しかしながら、『もう一つの世界は可能だ』という感覚は存在している。」(282頁)

たしかに私たちの世代にとっては、堅固で十分統一された反資本主義運動に期待がちである。しかしハーヴェイも認めるように、それは存在していない。そしてそのような主体が存在しない以上、必然的に、資本主義的エリートや貨幣権力、軍事力を抑制する明白な方法も見出せない。だが、たくさんの人々がさまざまな形で対抗しており、それらが磁場を形成し、それが資本に打撃を与えているという観点から見れば、新たな可能性を見出すこともできるのではなかろうか。しかし、ハーヴェイはそのような方向性ではなく、伝統的な左翼の方法にこだわって次のように述べている。

「グローバルな反資本主義運動は、何をなすべきなのか、なぜなすべきなのかに関

する、人々を鼓舞するような構想なしには本格的に出現しえないだろう。つまりここでは二重の閉塞が存在するわけである。オルタナティブな構想の欠落が反体制運動の形成を妨げていること、そして、このような運動の不在がオルタナティブの明確化を排除していることである。」(282頁)

事実上の共産主義運動が、過去のそれとは異なって、政治権力奪取から社会変革へという方向を拒絶していることはハーヴェイも認めている。しかし、組織論において、ハーヴェイは過去を引きずっているように思う。オルタナティブが迂回作戦としてなされるとしたら、その運動の意識性は多様でまとめること自体が無理なものではなかろうか。とはいえハーヴェイは自らの見地から、とりわけ資本主義発展の共進化というアイデアから、「共一革命的理論の構築に向けて」と題して革命理論の考察を続けている。

「終わりのなき複利的資本蓄積に敢然と挑戦し、それによって人類史の主要な原動力としての複利的資本蓄積を終わりにするような革命的政治が必要であり、そのためには、社会変革がどのように起こるのかに関するメカニズムを深く理解しておかなければならない。社会主義と共産主義を建設する過去の努力の失敗を避けなければならないし、この巨大で複雑な歴史からの教訓を率直に学ばなければならない。だが、首尾一貫した反資本主義的運動にとって何が絶対に必要なのかということも認識しなければならない。この運動の基本目標は、剰余の生産と分配の両者に対する社会的管理を前提としたものでなければならない。

第5章で概観した共進化の理論を別の面から見てみよう。これは、共一革命的理論の基礎を形成しうるだろうか？政治運動はどこかを起点に開始することができる。労働過程においてか、自然との関係においてか、社会的諸関係においてか、革命的技術と組織形態のデザインにおいてか、日常生活からか、国家権力の再編を含む制度的・行政的構造の改革の試みを通じて。重要なのは、政治運動がある活動領域から別の活動領域へと相互に強化しあう仕方で絶えず移動することである。」(283~4頁)

ハーヴェイの問題意識は、七つの領域でのそれぞれの個別の運動が、相互に強化しあう形で絶えず移動できるような政治運動であり、これが「共一革命理論」と名づけられている。

「共産主義ないし社会主義的オルタナティブをつくり出すこれまでの試みは、異なった活動領域間の弁証法を運動させつづけることに致命的に失敗したし、諸領域間の弁証法的運動における予測不可能性と不確定性を把握することにも失敗した。資本主義は、まさにこの弁証法的運動を維持することによって、そしてその結果生じる、危機/恐慌を含む不可避的な緊張関係を包摂することによって生き残ってきた。」(284頁)

ここでハーヴェイが異なった活動領域での弁証法の運動として想定しているものは、実はベクトルの合力とは異なる力の指定ではなかろうか。というのも資本主義の場合は、何も特定の政治的目的意識なしに、この弁証法的運動を維持してきたからだ。そしてそれは、その根底では、人々の無意識のうちでの本能的共同行為に支えられている。この無意識のうちでの本能的共同行為からの離反者たちが、七つの活動領域から輩出してきており、その人々がどのような同盟を形成しうるのか、問題はこのように提起されているのではなかろうか。

3. ラディカルな平等主義

ハーヴェイのすばらしいところは、とりあえずラディカルな平等主義という問題設定をして、自らの課題の解決についての試論を展開していることだ。

「社会的諸制度の領域で、ラディカルな平等主義がラディカルに平等主義的な形で機能するためには、所有のまったく新しい概念、すなわち、私的所有の権利ではなく共同所有の権利というまったく新しい概念が必要になるだろう。その上で、社会的諸制度をめぐる闘争は、政治的関心の中心へと進み出なければならない。

というのも、資本主義は市場の中ではラディカルな平等主義に同意しているが、この平等主義は、マルクスが言うところの、生産という『隠れた場所』の内部に入るやいなや崩壊するからである。」(289頁)

私的所有の権利への侵食は、認知資本主義論にもとづくコモンを主張しているオペライズモによってなされている。他にもラテンアメリカの農民の闘争にも見られる。しかし、これらの運動を共同所有の権利の要求というくくりで政治的関心の中心にすえられるのかどうかということについては疑問が残る。とはいえ運動の理念的な評価として、所有の問題を切り口にすること自体は間違っていない。

「したがって、アウトノミア運動が、労働過程内部でラディカルな平等主義を達成することはいかなる反資本主義的オルタナティブを構築する場合であっても最高度に重要であると主張したのはまったく正しい。自治と労働者自主管理の構図はここでは理にかなっているものであり、それがその他の領域と民主主義的な形で結びついている場合にはとりわけそうである。」(290頁)

アウトノミアの実験が、オペライズモによって、認知資本主義論へと展開されていることを考慮すれば、自治と労働者自主管理というかつての目標を掲げるだけでは不十分だろう。そして自治と労働者自主管理の実現は、果たして、この目標を掲げることで可能になるのかという問題もある。既成の職場の自主管理化というよりも、むしろ生活の必要性から、新たに起業する試みという新たな可能性が開けている時代という観点が必要だろう。

「ラディカルな平等主義と私的所有との間の結びつきを断つ方策が見つけれ出されなければならない。そして、たとえば共同所有権と民主主義的統治の発展にもとづいた諸制度に向けた架け橋が構築されなければならない。強調点は、ラディカルな平等主義から制度的領域へとシフトされなければならない。」(290～1頁)

ハーヴェイが『新自由主義』で提起しているように、ラディカルな平等主義や、自由を、新自由主義者の独占物にさせてはならない。この意味で、新自由主義批判との絡みで問題を提起する必要がある。しかし、それが果たして制度的領域へのシフトで可能となるであろうか。とりあえずは、事実上の共同所有と、協同的統治の実現の場所を磁場として作り出していくことが必要だろう。そして、そうすれば、共同所有と民主主義的統治とは必ずしも馴染むものではなく、民主主義の限界と協同思想の復権が課題となるであろう。

「同じように、ラディカルな平等主義、生産の組織化、労働過程の機能の仕方、この三者の連結性は、ワーカーズ・コレクティブ、アウトノミア組織、協同組合、その他さまざまな社会的給付の集団的形態によって提唱されている路線に沿って練り直されなければならない。ラディカルな平等主義のための闘争はまた、自然との関係を再概念化することも必要とする。……自然というものが、われわれ全員がそれに対する平等な権利を持つと同時に巨大な責任をも平等に負っている一個の偉大な共有財(コモン)であるという認識によって導かれるべきである。」(291頁)

私がコメントしてきたことについては、ハーヴェイもうすうす分かっていただろう。ここではラディカルな平等主義をはじめとするハーヴェイ自身の提起が、現実の実践によって練り直されなければならないことが確認されている。またここで自然との関係が述べられているが、ハーヴェイの自然の捉え方が、トータルな対象としての自然に限定されているようなところが気になる。労働過程や私的所有も人間の自然との関係であり、自然との関係の再概念化はこのいわゆる社会的自然の領域においてこそなされねばならない。とりわけ、ネグリとハートや、ホロウェイたちが、富の源泉を唯一労働にしか求めていないという偏見をただすためにも。

4. 資本主義の支配的实践

ラディカルな平等主義という仮説からのオルタナティブの思想的課題の追求の後、ハーヴェイは、精神的概念の変革と、反資本主義運動と批判的知識人の役割について論じている。

「われわれに必要なのは、世界を理解する新しい精神的諸観念である。だが、それはいったいいかなるもので、誰がそれを生み出すのか？より広範に知の生産に影を落とす社会学的不安と知的不安の両者を踏まえてこのことを考える必要がある。」(294頁)

ハーヴェイはマルクスを引き合いに出して「思想(観念)が歴史における物質的力である」(295頁)ことを確認し、そして現代のインテリゲンチヤのおかれている状況を概括しながら、現在の「知の構造」が機能不全に陥っており、正当性を失っていることを確認した上で、唯一の希望として「洞察力を持った学生の新世代」に期待している。しかし、若者たちだけでは、精神的諸観念における革命を生み出すための十分条件ではないと考えているハーヴェイは批判的知識人にも課題を与えている。

「多くの疎外された知識人と文化労働者もまた、メディアや教育機関や文化的生産機構における権力関係の重荷に抗議している。それらは、市民的議論の言語を劣化させ、知を絶え間ないプロパガンダに変え、政治と大きな嘘つき合戦以外の何ものでもないものにし、言説を独善的議論に変え、偏見と憎悪を蔓延させる手段に変えている。そして、人々を保護すべき社会的諸機関を腐敗の汚水槽に変えている。」(299頁)

批判的知識人がおかれている状況はこのようなものではあるが、しかし、批判的知識人にもこのような状況の形成に責任があること、とりわけ新自由主義と共犯関係にあった知識人たちは反省が必要であり、そのうえでようやく「剥奪され略奪された人々との意味のある同盟」(299頁)が構築されるだろう。またハーヴェイは、剥奪され略奪された人々の知識人部分(グラムシの、有機的知識人)が決定的な役割を担うことを予想している。

「資本の謎を解き、政治権力が常に不透明なまま維持したがっているものを透明なものにすることは、どんな革命的戦略にとっても決定的だろう。」(300頁)

ハーヴェイはこの資本という敵の暗号を解読することは、批判的知識人、有機的知識人、そして、剥奪され略奪された人々との共同作業だと考えている。そしてこの暗号が解読されない限り、資本主義の支配的实践によるオルタナティブな空間の侵食に対処できないからだ。

「何度となく繰り返し政治運動はオルタナティブな空間を構築してきた。その内部では一見したところ異なる何かが起こるのだが、そのオルタナティブはたちまち資本主義的再生産の支配的实践に再吸収されてしまう(労働者協同組合、参加型予算、等々

の歴史を見よ)。その際の結論は明らかに、まさにこの支配的実践こそ対処しなければならない当のものである、ということであろう。この支配的実践がどのように機能するかをはっきりと暴露することは、ラディカルな理論化にとっての焦点とならなければならない。」(300頁)

この資本主義的再生産の支配的実践によるオルタナティブの再吸収という問題提起は非常に重要である。ここではこれ以上の展開はないが、ペーパーバック版あとがきには、この支配的実践の特徴が述べられている。

「終わりなき資本蓄積と終わりなき成長の論理はわれわれに絶えずつきまとっている。それは、われわれの倫理的傾向が何であれ意識的ないし無意識的に従っている隠れた至上命令を内部化しており、市場の見えざる手はその一つにすぎない。これは支配的な実践のあり方であり、そこには巧妙に植えつけられたあらゆる政治的主体性が付随している。それゆえ、われわれの世界を根本的に変革するためには、このような支配的実践に対して建設的な形で反抗しなければならない。終わりなき資本蓄積を通じた終わりなき複利的成長の問題に正面から取り組み、それを克服しなければならないだろう。これこそ、われわれの時代の政治的必然性である。」(343頁)

このハーヴェイの問題提起は、彼が、商品所有者の無意識のうちでの本能的共同行為という実践と、商品・貨幣・資本に人々が意志支配されているという現実接近していることを示している。まさに資本主義における人々の支配的実践とは、無意識的なものと、物象に意志支配された限りでの意識性との混合なのだ。そしてこれが資本主義における社会生成力として機能しているのだ。ハーヴェイは政治的主体性に注目しているが、そうではなく、社会的主体性に注目する必要がある。新自由主義の自己責任論にしても、それは社会的主体に関わるものであったからだ。

そうすると、ハーヴェイの問題提起は、オルタナティブな社会生成についての実践を用意することによって応えられよう。つまり、商品所有者の無意識のうちでの本能的共同行為や、また商品・貨幣・資本といった諸物象に意志支配された意識性による、既成の社会生成に対抗できるオルタナティブな社会生成の可能性の解明である。それは、社会が人々の対面関係において都度生成されているということの解読から始まる。対面関係における社会生成のヘゲモニーは働きかけられる側(見られる側)にある。従来社会学では、対面関係での見る側をマジョリティに、見られる側をマイノリティに固定化して、眼差しについて理論化してきた。しかし、これはハーヴェイの言う支配的実践を前提とした分析でしかなかった。支配的実践にあつては、剥奪され略奪された人々が、この多数者が見られる側におかれている。しかし、見られる側にこそ新たな社会生成のヘゲモニーがあること、ここに、ランシエールの言う、既成の感性的なものの分有の切断という契機を持ち込む可能性が開けているのだ。

「オルタナティブはこれから発見されなければならない。そして、この点では、グローバルな共革命的運動の出現は決定的である。それは、自己破壊的な資本主義的行動様式の流れをせき止めるのに決定的であるだけでなく(それ自体重大な成果であるだろうが)、次のことにとっても決定的である。すなわち、自分たちを再組織化し、新しい集団的な組織形態、知識バンク、精神的諸観念を構築しはじめること、その間に、新しい社会的諸制度、社会的・自然的諸関係の新しい形態、ますます都市化する日常生活の再設計を伴ったさまざまな実験を行うことである。」(344頁)

このハーヴェイの提起は、オルタナティブな社会生成の理論と、既成の感性的なものの分有の切断という政治で補足することで、より実践的なものとなるだろう。

このあと、ハーヴェイは、略奪された人々の二大カテゴリー、および変革主体の諸潮流と組織形態を考察し、最後に新しい反資本主義運動に向けて、という提言でしめくくっている。紙数の関係で、ここで私の補足は終えることにしたい。

岩田 弘さんの新しい Kommunismus 論

(解題) この文章は、岩田弘さん追悼集会に向けての冊子に寄稿したものです。

岩田さんとの出会い

岩田 弘さんとは、まだ統一ブントの頃、中央委員会が東京で開かれたときなど、マル戦派の会合に招かれたりして、何度か会議の場でお会いしたことがあった事を懐かしく思い出す。このように直接の出会いがあったにもかかわらず、岩田さんの理論には不思議と無関心で、宇野弘蔵をはじめ宇野派の学者たちをなで斬りにした時(拙著『資本論の復権』参照)にも何故か岩田さんは私の眼中に入ってはこなかった。

数年前、まだお元気にされていたころ、東京の会合でお会いし、ご挨拶させていただいたが、それもあって、『情況』誌に書かれていた論考を読んでみたところ、生物系の話だったので驚いてしまったことが記憶に残っている。

そんなことで岩田理論には全くの素人の立場で、『世界資本主義Ⅰ』(批評社、2006年)を手にとって見た。中国に注目されていることはさすがと感じたが、私の興味はソ連論と現代における革命の問題における商品経済廃棄の展望のところであり、これらについて感想を述べて追悼の意の表明としたい。

ところで、横道にそれるが、最近翻訳されたハーヴェイの『資本の謎』(作品社、2012年)を読んでみて、これが単なる金融危機(恐慌)を論じた書物ではなく、現代革命の可能性を追求した書物であることが分かった。しかしそれが成功するためには幾つかの欠落部分が目に付き、具体的には、価値形態論(ハーヴェイは、『資本論入門』を書きながら、価値形態論はちゃんと解読していない)、信用論(信用制度については言及しているが、利子生み資本についての原理的分析はなされていない)、ソ連論(これについても取り上げられているが平板である)についての問題提起をしようと考えている。そこで感じるのだが、現在、ネグリとか、ジジエクとか、そしてハーヴェイたちがネットで議論しているのだが、ブントの人たちは蚊帳の外のようなのだ。せめて岩田さんには国際的理論家として登場して議論を深めてほしかったという感想を持つが、すでに成果を上げられておられていたなら不明をお詫びしたい。

『世界資本主義Ⅰ』の概要

岩田さんはこの著書の副題に「新情報革命と新資本主義の登場」ということを掲げて、さらに「グローバルネットワーク資本主義としての新資本主義」「資本論体系の今日的意味を問う」と続けておられる。この書の第2部は旧著『世界資本主義』の再録のようで第1部が副題のテーマを扱っている。第1部は三つの章からなっているが目次は次のようなものだ。

第1部 新情報革命・新産業革命と新資本主義の登場——資本論の今日的意味を問

第1章 二つの世界戦争とその戦後産物としての現代資本主義——現代資本主義の構成部分としての現代社会主義

第2章 新産業革命の開始と現代資本主義の分極化

第3章 資本論体系の今日的意味を問う——人間コミュニティ再生の多様な運動としてのコミュニズム

第1章では、岩田さんがソ連社会主義を、従来の宇野派の現代の捉え方である資本主義から社会主義への過渡期という位置づけから、ソ連自体が国家資本主義であったというように総括していることが知られる。次に第2章では、現代資本主義を新資本主義と規定する根底に新情報革命がおかれ、この新情報革命が引き起こした中国・東アジア資本主義の台頭を、現代資本主義の分極化として論じられていることが分かる。そして第3章では、ソ連崩壊の総括にもとづき、資本主義の新たな発展を踏まえて、新たな共産主義論が「人間コミュニティの再生の多様な運動」として規定されていることが判明する。

このような全体的論調の中で、岩田さんは『資本論』が体系的に提起している資本主義の廃棄が「商品経済・貨幣経済の廃棄と一体である」(173頁)ことを指摘し、そしてこの資本の廃棄の条件については『資本論』では「直接にはなにも提示しない」(174頁)と述べて「資本主義廃棄の今日的条件」の解明と「人間コミュニティ再生の運動としてのコミュニズムへ」という提起を自らの課題とされた。

新しいコミュニズムの提起

資本主義廃棄の今日的条件としてまず挙げられるのは「新情報革命・新産業革命が人類史に準備するもの」(174頁)として、①「分散・並列・ネットワーク革命のグローバルな進展こそが、資本主義廃棄の最終的な条件にほかならぬこと」②「商品経済を廃棄することなしには、資本主義の廃絶はありえないということ」③「資本主義廃絶の一般的前提をなす商品経済の廃棄は、法令や法の強制執行によっては、より一般的に言えば、国家的な制度改革によっては、実現しえないということ」(175頁)といった論点だ。

次に「中国・東アジア資本主義の台頭が意味するもの」(175頁)として、「こうした世界経済の構造的変化もまた、当然のことながら、資本主義廃棄の今日的条件の重要要因となる。あるいは、21世紀的には主要動因となろう。」(175頁)と指摘されている。

最後の「20世紀社会主義崩壊の後遺症」(176頁)では、「国家病、権力病の批判的総括」(176頁)が必要とされ、内容的にはマルクス主義者の革命論がブルジョア革命の延長線上にプロレタリア独裁とプロレタリア革命を展望するという「自由主義ブルジョアジーの国家観の急進民主主義的な継承」(176頁)であったとされている。

では、「人間コミュニティ再生の運動としてのコミュニズムへ」(177頁)はどのような内容だろうか。

まず、国家の廃棄と資本主義の廃棄について考察し、前者が「制度的革命と法的革命の産物」(177頁)であるから、「制度革命や法的革命によって、簡単かつ容易に廃棄しうる」(177頁)が、後者は商品経済の廃棄を意味するし、商品経済は制度革命や法的革命の産物ではないので、このようなやり方では廃棄できないことが確認されている。

では後者の廃棄はどうするか、と問いを立てて、互惠交換の普遍性に比べて「人類

史における商品経済関係のこうした時空的限定性」(178頁)に廃棄の可能性を見出し

ている。そこからさらに進んで、商品経済的交換と互惠交換の特徴の比較を行って、互惠交換が生物コミュニティの組織原理としてあることを確認している。その上で、「物質・エネルギーの連鎖的交換系としての生物系」(179頁)の考察から、結論的に「新情報革命・新産業革命のこうした生物生体システムへの接近」(180頁)を論じ、具体的には「自立的・独立的な構成単位の多角的・多層的なネットワーク的統合体、グローバルな分散・並列・ネットワークシステムとしての産業編成」(180頁)をあげている。

以上の考察にもとづいていよいよ「人間コミュニティ再生の運動としてのコミュニズムへ」という提起にいたる。その提起は4点にわたっている。

まず、ソ連の総括から、社会主義崩壊の後遺症で触れられた国家病の克服、プロレタリア独裁による社会革命という課題設定の限界が指摘される。

次に、問われているのは、「国家権力による一挙的な制度革命ではなく、コミュニティ自身によるコミュニティ再生運動——自由で自立的な主体としての再生の運動」でそれを担うのは工場・職場における労働者コミュニティと地域における多種多様な住民コミュニティであるとされる。

三つ目に、このコミュニティ再生運動の積み重ねがコミュニズム革命とされるが、しかしそれは階級闘争ではなく、「勤労人民大衆自身の内部闘争、自己闘争」(182頁)となり、「前進と後退を繰り返す幾つかの世代の継続的事業とならざるをえない」(182頁)とされる。

最後にこのような運動過程に対して、「新情報革命・新産業革命は強力な手段を提供する」(182頁)ことを指摘し、このような運動の実現可能性の物質的基盤を示唆している。

新しいコミュニズム論への感想

ソ連崩壊の総括について、私も商品・貨幣関係はプロレタリアートの独裁による法的・行政的な意志の力はなくせないことをソ連崩壊前の1988年の段階で主張していた。その際に『資本論』初版本価値形態論の解説から、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの、無意識のうちでの本能的共同行為によるものであるがゆえに、意志の力でこれを廃絶することはできず、迂回してこの共同行為を無用とする経済的関係を構築することが問われているということを提起した(拙著『価値形態・物象化・物神性』353~7頁ほか参照)。

岩田さんは私のように価値形態論からではないが、ソ連崩壊という歴史的過程からの総括として、資本主義の廃棄が、商品・貨幣関係の廃棄と一体であることを主張し、かつ、この関係は制度的・法的関係の産物ではないということから、国家権力によっては廃棄しえないと述べている。ここで私が学んだことは、国家は制度的・法的に形成されるものだから、廃棄は簡単で、商品経済はそうではないという視点だ。国家の廃棄が簡単だというようには思えないが、しかしこの発想を利子生み資本の廃絶に生かせるように思ったのだ。

周知のようにケインズはマルクスよりもゲゼル(減価するマネーを提案した)の方が後世役に立つと予言した。私にとってはこの予言は謎であったが、岩田さんの提起を受けて考えると、もともと金利生活者の安楽死を考え、貨幣の改革に並々ならぬ情熱を注いでいたケインズが、プロレタリアートの独裁などは考慮の外で資本主義の改

良を考えたときに、金利生活者の安楽死の方法として、ゲゼルの提起を生かそうと思ったのではないかということだ。つまり商品・貨幣関係は商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって作り出されるが、利子生み資本はそうではないということがポイントだ。社会は利子の廃止については政策的に決定し実施することが可能なのだ。

岩田さんの新しいコミュニズム論はコミュニティ再生運動とされているが、その運動の政策的中身が問われるであろう。私は現代革命の可能性の追求については、先にあげたハーヴェイ『資本の謎』を現時点での最も包括的な提起として評価するものであるが、欠落部分である、価値形態論、信用論、ソ連論の輪郭が、岩田さんの『世界資本主義Ⅰ』を論じるなかで明確にできたように思っている。岩田さん、ありがとうございました。

大阪自由大学資本論講座記録(第1回) 現代の問題意識から『資本論』を読み解く

(解題) 大阪自由大学準備会のプレ企画として、資本論講座を担当することになりました。基本テーマを「現代の問題意識から『資本論』を読み解く」とし、①ソ連崩壊と『資本論』、②物象化と『資本論』、③経済危機と『資本論』、④現代革命と『資本論』、⑤社会生成と『資本論』、といった課題で講座を組んでいます。毎月2回のペースで、途中休みを挟んで、前・後期に分けます。講座は事前に文章を準備し、余裕を持って配れるようにします。以下の文書は事前に配布した文章です。

ソ連崩壊と『資本論』(第1回)

ソ連崩壊の原理的根拠とは何か(上) ソ連崩壊までの歴史的経過と評価

1. 革命がめざした共産主義とは何か

まず、共産主義とは何かということから始めます。個人的な話になりますが、1960年の安保闘争を闘っていた頃には共産主義とは何か、なんてほとんど考えなかったです。そんなことは何も考えずに、とにかく目の前の安保闘争を闘って、次の社会はどのような社会かということについては全然議論はしなかった。というのも、未来社会がどのような社会かといった詮索は、空想的社会主義者がやってきたもので、マルクス主義者は社会変革をめざした実践をすることが大事と教えられていたからです。

ところが共産主義とは何かということに関して、徹底的に明らかにしないと身が持たないみたいになってきたのが、本格的な武装闘争をやろうという話になった時でした。軍事組織を作るという時に、そういう問題をどう考えるのかということに突きつ

けられたわけです。軍事組織を作るということはどういうことかと言えば、日常的な運動の延長にそれをちょっと過激にしていくなこと、例えばデモのときにゲバ棒を用意してデモを抑圧する機動隊の攻撃に対峙するといったことじゃなくて、一から軍事組織を作って戦闘するということで、毛沢東が「井冈山(せいこうざん)」に籠もって建軍したことを参考にしていました。

建軍すると、メンバーは日常の闘争から離れて独自に共同生活に入りますから、武装闘争がめざす革命とは何かということについて、指導部の側に説明責任が生じるんですね。そうすると、それをもう改めて勉強しなくちゃいけないってことで、その時に明らかにしたのが、マルクスが言っていることですが、結局は階級の廃絶に尽きるということでした。階級を廃絶しようと思ったら階級の基盤である生産関係を変えなくちゃいけない。今日の生産関係は資本主義ですから、具体的には商品・貨幣・資本を廃絶することだということですね。これが共産主義で、レーニンもこういう認識だったし、ロシア共産党もこういう認識であったというふうに思っていました。

システムとしては、自由な諸個人による協同組合的社会というのは今は大体ほとんどの人がこういう認識ですけども、以前は決してそうではなくて、国有化がそうだというふうな意見が多かったんですけども。現在ではアソシエーション運動とかいう話も出てきますので、自由な諸個人による協同組合的社会だろうということですね。あと、効果って書きましたけども、これは以前はどうでもいいように思っていたんですが、必要労働時間の短縮と自由な時間の拡大による諸個人の全面的発達、です。これは今日のプレカリアートがおかれている、不安定でかつ生きている時間をトータルに搾取されているように意識されている今日、重要な視点ではないかと思えます。

2. 共産主義は如何にして実現できるか

その次に、じゃあこういう社会はどうやって実現できるのかということなんですけれども、ひとつは僕らが建軍の運動やっていくなかで、これは面白いと思ったのが国際労働者協会(第1インターナショナル)の一般規約というのがあって、短い規約がいくつかあるんですけども、その前文に、働く人々の資本への経済的隷属があらゆる問題の根底にあるということを言っていて、要するに経済的隷属からの解放が大目的であるということを言っているんです。これはやっぱり原則じゃないかなということですね。

(注) 国際労働者協会暫定規約前文「労働手段すなわち生活源泉の独占者への労働する人間の経済的な隷属が、あらゆる形態の奴隷制、あらゆる社会的悲惨、精神的廢類、政治的従属の根底にあること。したがって、労働者階級の経済的解放が大目的であり、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること。」

それから『ゴータ綱領批判』に書かれていて、有名な資本主義社会から共産主義社会への過渡期にはプロレタリアートの独裁が必要だということ。あと、レーニンの『何をなすべきか』ですね。社会主義的意識は労働者の自然発生的な運動のなかから作り出せる問題ではなくて、インテリゲンチヤが外から持ち込むべきだという話ですね。それから『何をなすべきか』はいわゆる前衛党の組織論でして、これは武装蜂起による権力奪取に用意がある前衛党の提起でした。ですから、単に機関紙を発行して全面的政治暴露やるということだけではなくて、そういう機関紙を受け取る組織が武装蜂起の通達受けたら全国一斉に立ち上げられるみたいな、こんなイメージで『何をなすべきか』は書かれているわけですよ。そんなことを一応、これは60年の時にはここまで

分からなかったですけれども、70年安保闘争の時にはこういう問題じゃないかなというふうに思っていました。それは毛沢東の革命戦争で民族を解放する闘いの中で社会主義を実現しようという革命戦争路線との対比で、レーニンの武装蜂起の党の特異性が理解できたという問題でもありました。

3. ロシア革命が実現したこと

では、ロシア革命が何を實現したのかということで、1917年10月革命はツアーの権力を打倒してプロレタリア独裁を實現したと、一応こう見ておこうということですね。レーニンは10月革命が始まる4月に亡命していたスイスから封印列車でロシアに帰ります。それまでレーニンはロシア革命の性格を労農民主独裁と考えていて、ツアーの権力を打倒しても直ちに社会主義には向かえないと考えていて、民主共和国をイメージしていました。しかし、第1次世界大戦におけるロシアの敗北というチャンスに大衆運動が始まったときに、封印列車からペテルグラードに降り立ったレーニンは「4月テーゼ」を読み上げ、ロシアの革命は社会主義革命をめざすべきだと述べています。2月革命でツアーが退位し、ソヴィエトと臨時政府（ブルジョア政府）の二重権力状態が成立していましたが、ボリシェビキは全権力をソヴィエトへというスローガンを掲げて、10月にはケレンスキーの臨時政府を打倒する無血の武装蜂起で権力を掌握するのです。

いったん権力を掌握したものの、列強の介入と白軍による武装闘争が始まり、内戦となり、レーニンは戦時共産主義の政策をとります。これは資本家階級を収奪して生産手段を国有化したんですけれども、同時に農民からも収奪したんですね。農民からは食糧の強制徴発を行っていました。一時期にある意味での平等な社会が出来たので、これは共産主義の實現だというように観念されたこともあり、戦時共産主義という名称で呼ばれています。しかし、この体制は長続きせず、農民出身の兵士がクロンシュタットの反乱を起こすというふうなことがありまして、それで1921年にはネップ（新経済政策）へ移行します。ネップは強制徴発じゃなくて食料税ということにするわけですから、市場経済をある程度前提にして、農民の自由な経済活動を認めたという形ですね。

（参考文献）ロバート・サーケイス『ロシア革命 1900～1929』（岩波書店、2005）

4. スターリン主義の成立

その後、スターリン主義が成立していきます。ひとつは党の肅正で、古参ボルシェビキの肅正とそれから官僚主義が台頭してくるという問題。それから農民の強制集団化があります。自由な小経営だった農民の、コルホーズとソホーズへの集団化。それから、これずっと後ですけれども、スターリンも社会主義社会には商品生産はないということを最初言っていたのですけれども、結局いつまで経ってもなくならないわけですから、結局それは社会主義的商品生産だというふうな理屈を付けてですね、ある意味、商品生産の廃絶はあきらめたということです。それから、これとその次の一国社会主義とはセットなんですけれども、世界革命なしにロシアは社会主義社会に到達しえないという、レーニン、トロツキーはそういう考えだったんですけれども、スターリンがそれを修正して、1国でも社会主義社会を建設できるんだという、こういう修正をしました。この4つぐらいがスターリン主義の指標になっています。

5. ソ連「社会主義」とは何だったのか

その後、ソ連「社会主義」とは何かということで、60年のブントの時から、対馬忠行のソ連論とか、あとトニー・クリフのソ連論とかいろいろありまして、ソ連は国家資本主義だという説がソ連を批判する理論のなかでは一番多かったんじゃないかとは思いますが、私としては官僚が階級になっているということですね。官僚が支配する社会と考えました。日本の官僚でもそうですけれども、官僚が階級になっているのではないかということがひとつです。この考えは1980年頃に「ソ連における階級の形成」という論文にまとめました。

つまり、資本主義の場合の労働者は生産手段から完全に切り離されているのですけれども、ソ連の場合どうもそうではないんじゃないかということで、ある種の占有関係ですね。封建的な制度も占有という法律的概念から説明されるんですけども、農民もそれから封建領主も両方生産手段である土地にある種の権利関係を持っているという、こういう感じですね。農民も領主も土地の自由処分はできない。ですから官僚（ソ連ではノメンクラトゥラと呼ばれましたが）が支配するソ連の生産関係は国有の生産手段の占有関係があって、その占有関係を利用して官僚が労働者を搾取しているという、そういう感じかなとかいうふうに考えました。それで結局、私自身の規定としてはあれは国家制社会主義じゃないかと。それは非常に不安定で、補足的な政治革命、これはトロツキーが言ったことなんですけれども、それかネップへ回帰するかどっちかという、こういうふうなことを考えていました。

（資料）コピー「ソ連における階級の形成」

6. ソ連の崩壊

まさかと目の黒いうちには、とっていましたけれども、ソ連が急速に行き詰まって崩壊していきました。ペレストロイカの失敗というのはやっぱり補足的な政治革命の挫折という意味もあるのではないかと。もちろんこれだけではないのですけれども。それから、やはり一時期ネップ状態になっていたのではないかとというふうに私は思いました。この前ソ連崩壊20周年の社会主義理論学会のシンポジウムで、加藤志津子（明治大学）さんが報告のなかで、ソ連の大きな企業、国有企業が私有化される時にいったんは労働者に株を渡したって言っているのです。もしね、ネップへの回帰と協同組合的社会的な建設というふうなことを考えているグループがあれば、その時に労働者の協同組合的な所有というところに頑張って持っていけば、行けないことはなかったのだと思いました。これはもう「たら」の話でしょうがないのだけでも。

ですからいづれにしてもソ連の社会がそう簡単には資本主義になれなかったということですね。いったんは労働者に株を渡したけども、結局誰もそんな指導もしないし放ったらかしですから、労働者はそんなものも持っていないので、また売りはらって、それで成り上がりの官僚がそれを全部買い集めて資本家になっていくという、こういう経過があったわけですね。それで、しかも悪いことには、資本主義化のときにもう新自由主義の影響が最高の時でしたよね。ポーランドとかロシアの資本主義化を主導した連中（ジェフリー・サックスたち、サックスは後にこのときの過度な自由化について反省している）が、徹底した新自由主義的な発想で極端な自由化をやるわけですね。そんなことがあって、それで一気に市場経済化ということになっていくのですけれども。その時にやっぱり生産手段の占有があったということは、結構その後のロシアの資本主義を規定しているのではないかなと。やはり、なかなか自由

主義的な資本主義には、今でも成りきれてないのではないかなというふうな気がしています。これはちゃんと実地に調べているわけではないんですけども、どうもそういうことじゃないかなというふうに思ったりもしています。

7. ソ連「社会主義」の原理的批判から共産主義の再生へ

それで、あと最後、ソ連「社会主義」(カッコ付きの社会主義)の原理的批判から共産主義の再生へと書いたんですけども、原理的根拠と言ったのは結局ここですね。商品から貨幣を生成する無意識のうちでの本能的共同行為、これをどうするかということです。なんでスターリンが、商品生産がなくなるということで社会主義的商品生産みたいなことを言わざるを得なかったか。やはり商品・貨幣というのはなかなかなくせないんですね。それはやはり、何でなくせないかっていうことは実は『資本論』をちゃんと読めば書いてあるんじゃないかなってというのが、今日のこの後の報告の中身になります。

それから外部注入論批判で書きましたけども、これはランシエールという人が、アルチュセールの弟子ですけどね。アルチュセールはこの外部注入を言っている人ですけども、かれが自分の先生の説を批判して、それでこれ日本語に翻訳されてないんですけど、『プロレタリアの夜』という本を書いてですね、そこで、労働者は外部注入なんかしなくたって共産主義を実現しようとしているんだということを、実証しているんですね。それで彼らは、直ちに平等を実現しようとする意志を本源的に持っている、こういうことを言っていて、私はこれはなかなか素晴らしいなと思って、ここに書かしてもらっています。

(参考文献) 市田良彦著『ランシエール——新音楽の哲学』(白水社)

それから同じくランシエールが政治に関して、「感性的なものの分有」という問題を提起しています。分有は「パルタージュ」っていうのがフランス語の原語ですけども、そういう問題を、『感性的なもののパルタージュ』(法政大出版局)という本は取り上げています。どう言ったらいいのかな、例えば、ランシエールの民主主義論というのは古代ギリシャの民主主義です。奴隷も市民も同じ言葉を話すわけじゃないですか。ところが市民の言葉は政治としてちゃんと位置付けられるのだけでも、奴隷の言葉は単なるノイズ、鳥が鳴いているのと同じようにしか政治的には評価されない。そういうのが当たり前だというふうに、みんな感覚的に分かっている、そういう感覚をみんなが持っているから一つの政治システムがちゃんと機能しているという、大体こういう発想ですね。ですから、そういう政治を変えようとしたら、現在あるそういう感性的なものの分有をある種切断するような新しい感性的なものの分有、これを作り上げていくことが必要だ、ということを言っています。

これは、私が2月4日にたまたま高須裕彦さんのウォール街占拠視察報告の話の聞きに行った時に実感したんですけども、彼らがやろうとしているのは結局そういうことかな。だから普通の常識的なことで誰もがそれを何となく分かって、理性じゃなくてね、感覚的に承認しているようなことをやっぴりちょっとずらし切断し変えていって、そこから何か新しいものを作っていこうみたいな、こういう発想があるのではないかなとか思いまして、そういうふうなこともちょっとここに入れたわけです。

ソ連崩壊と『資本論』(第2回)

ソ連崩壊の原理的根拠とは何か(下)

『資本論』初版価値形態論の意義とソ連崩壊の原理的根拠

1. 『資本論』の価値形態論、三つの異文

『資本論』の価値形態論には三つの異文があります。初版の第1章商品のところに書かれているもの、これを初版本文と名づけておきます。あと初版には付録がついていて、これは付録。そして現行版の第1章商品のところの価値形態論で、これを現行版と呼びましょう。

このように、マルクス自身の手になる価値形態論というのは三つありますが、その来歴から始めましょう。初版の本文は、マルクスが散々苦勞して書き上げたもので、これを僚友のエンゲルスに読んでもらいました。ところが商品の章を読んだエンゲルスは、価値形態論のところは、難しすぎるので、別々の見出しをつけたり、歴史的な叙述を入れたりしてほしいと要望しました。ところがマルクスは初版本文に区分はつけたが、同時に付録を書いたのです。ですから価値形態論には初版本文と付録があります。この付録は初版にそのままついています。現行版というのは、マルクスがまた初版本文を書き直したのですが、書き直したときに付録を肉付けする形で現行版を書いているのです。注に、エンゲルスの手紙とマルクスの返信をつけておきますが、これを精読すれば、エンゲルスとマルクスの価値形態論へのスタンスの違いがよく分かります。とくに、『資本論』の商品章の最初のテキストは『経済学批判』だったのですが、エンゲルスは価値形態論の未展開な最初のほうがいいと思っているのです。そして論理=歴史的な発想があります。それに対してマルクスは、エンゲルスの発想を退け、価値形態論の解説に興味をもつ知識欲のある青年に期待しているのです。

(注)

*エンゲルスからの手紙

「だがもう改める必要はない、また付録でこれ以上それについて書くこともないと思う、というのは俗人たちは何とんでもこの種の抽象的思考にはなれていないし、おそらく価値形態のために苦勞してはくれないから。せいぜい、ここで弁証法的に得られた結果がもうすこしくわしく歴史的に論証され、いわば歴史によってそれが吟味されるだけでよいだろう、もっともそのためにも最も必要なことはすでに述べられているのだが。……君のやった大きな失策は、これらのより抽象的な展開の思考過程をもっと細かい区分と別々のみだしとによってわかりやすくしなかったことだ。……以前の叙述(『経済学批判』のこと)にくらべれば、弁証法的展開の鋭さにおける進歩は非常に顕著だが、叙述そのものでは僕には最初の姿の方がよりよく思われる点もある。」(『資本論に関する手紙』法政大学出版局、150~1頁)

*マルクスの返信

「価値形態の展開に関しては、君の忠告に従ったし、従わなかった。この点でも弁証法的にふるまうために、すなわち僕は、①、一つの付録を書いた。そのなかでは同じことをできるだけ簡単に、そしてできるだけ学校教師的に述べる。②、君の忠告に従って各前進命題をそれぞれ別々の見出しで区分した。それから序文のなかで『弁証法的でない』読者のために、*~*頁をとばしてその代わりに付録を読め、と書く。

相手にするのは俗人ばかりではなく、知識欲のある青年などもある。その上、事柄は全体にとってあまりにも決定的だ。

経済学者諸君は、これまできわめて簡単なことさえも見おとしてきた。すなわち、20エレ亜麻布=1着の上着という形態は20エレの亜麻布=2ポンドの未発展な基礎であるにすぎないということ、したがって、商品の価値がまだあらゆる他の商品に対する関係としてではなく、ただその商品自身の現物形態から区別されたものとして表現されているにすぎない最も簡単な商品形態が、貨幣形態の全秘密を、したがってまた、核心においては、労働生産物のいっさいのブルジョア的形態の全秘密を含んでいるということ。僕は最初の叙述（『経済学批判』のこと）では、価値表現が発展して貨幣表現として現われるにいたってから初めて価値表現の本来の分析を与えることによって、展開の困難を避けた。」（同書、153頁）

2. 『資本論』の価値形態論の意義

マルクスの返信には、価値形態論の意義が述べられています。『経済学批判』では、貨幣を前提にして価値表現の分析をしたのですが、『資本論』では逆に、簡単な商品形態のうちに貨幣形態の全秘密があることを解明しえたのです。そうすることによって、貨幣生成の秘密を解き明かしたのです。ここで『資本論』未読の人のために、価値形態論にいたる『資本論』の内容を紹介しておきましょう。『資本論』現行版の目次は次のようになっています。

第1部 資本の生産過程

第1篇 商品と貨幣

第1章 商品

第1節 商品の二要因——使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）

第2節 商品で表示される労働の二重性

第3節 価値形態または交換価値 → （価値形態論と呼ぶ）

第4節 商品の物神的性格とその秘密 → （物神性論と呼ぶ）

第2章 交換過程 → （交換過程論と呼ぶ）

第3章 貨幣または商品流通

第1節 価値の尺度

第2節 流通手段

第3節 貨幣

第2編 貨幣の資本への転化

第4章 貨幣の資本への転化

第3篇 絶対的剰余価値の生産

第5章 労働過程と価値増殖過程

第6章 不変資本と可変資本

第7章 剰余価値率

第8章 労働日

・・・以下略・・・

資本主義の生産の仕組みは、まず貨幣を集めてそれを投資するところから始まりまずから、貨幣とは何かが問題となり、そしてその問いは商品とは何かに行き着くので、マルクスは商品の分析から始めています。『資本論』の冒頭の一文を、最新の訳本である中山元訳で紹介しておきましょう。

「資本制的生産様式が支配的な社会においては、社会的富は『一つの巨大な商品の集まり』として現れ、個々の商品はその要素形態として現われる。だからわたしたちの研究もまた商品の分析から始まる。」（日経BP社版、『資本論』1、27頁）

今まで単に価値形態論と述べてきましたが、これは実は商品の分析から明らかとなったものでした。マルクスは商品の分析が、それが二重物であることの解明から始めています。まず商品として売られているものは物であり、有用物です。この物の有用性をその物の使用価値と呼びます。そして商品としては、この使用価値物が価格をもっていますから、この価格とはその使用価値の価値であり、あるいは交換価値です。こうして商品は使用価値であり、かつ価値であるという二重物であることが分かるのですが、マルクスは商品の使用価値の分析には深入りせず、価値の分析に入っていきます。

商品の価値とは、いろいろな使用価値をもつ商品がそれぞれ単一の観点から評価されていることにもとづいて成り立つのですが、この商品の価値の実体が労働であること、それも抽象的人間労働であることが分析によって導き出されています。そして商品は価値としては、抽象的人間労働の凝固物だと結論づけられます。このときに対象化された労働という観点が大事で、商品で表示される労働とは、生きた労働が対象化されて、商品として現象していると見るのです。

ついで、商品となっていてそれで表示されている労働それ自体が二重物であることの分析がなされます。商品の生産過程での生きた労働は、どのような使用価値を作るかという意味では、特殊な、目的を規定された形での人間労働力の支出で、マルクスはこの労働を具体的有用労働と名づけています。他方、生きた労働は、生理学的意味での人間労働力の支出で、これが抽象的人間労働という属性なのです。そして商品の価値を形成するのは、この生理学的意味での人間労働力の支出です。

商品の章もここまでは、そんなに理解に困難なことはありません。みんなで輪読すれば、理解できるでしょう。しかし、エンゲルスを困惑させたのは、これに続く価値形態の分析でした。なぜ価値形態の分析を必要とするかについては、マルクスは次のように述べています。

「商品の価値対象性は、つかまえどころがない点で、クイックリおかみと異なる。商品体の感覚的な対象性とは正反対に、その価値対象性には微塵の自然質料も入りこまない。だから、個々の商品をどんなにひねくりまわしても、それは価値物としては扱えられないものである。ところが、商品は人間の労働という同じ社会的単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性を有するということが、したがって、商品の価値対象性が純粋に社会的なものであることを想いおこすならば、その価値対象性が、商品と商品との社会的関係においてのみ現象しうるということは、全く自明である。我々は実際、商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている商品価値の足跡を発見した。いまや我々は、価値のこの現象形態に立ち戻らねばならない。

誰でも、他のことは何も知らなくても、商品が、その使用価値の種々雑多な自然形態と極めて著しい対照をなす共通な価値形態——貨幣形態——をもつということを知っている。だが、ここで肝要なことは、ブルジョア経済学によってはかつて試みられなかったこと——つまり、商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、その最も簡単な最もみすばらしい姿態から、燦爛たる貨幣形態までたどること——をなしとげることである。それによって、同時に、貨幣の謎も消滅する。」（『資本論』長谷部訳、角川文庫版、76～77頁、原典、52～3頁）→（この文章は初版本文にはない。）

マルクス自身が述べているように、価値形態論の意義とは、商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をたどり、貨幣生成の秘密を解き明かすことでした。そしてこれはブルジョア経済学によっては決して試みられたことはなかったのです。

3. 異文間の相違と初版本の第IV形態

では、現行版と初本文との価値形態論の骨格の違いを見てみましょう。別紙に価値形態の発展の4つの形態について双方から取り出しましたが、どこが違うかというところ、第IV形態が違うのです。第I形態、第II形態、第III形態までは同じですね。簡単な価値形態、全体的な価値形態、一般的な価値形態、ここまでは同じで、現行版では、付録もそうですけれども、第IV形態が貨幣形態になっています。ところが初本文は貨幣形態ではないのです。どう言ったらいいのかな、あらゆる商品が第II形態の全体的価値形態を持つという、そういう図になっているのです。これだとね、個別の商品がそれぞれ独立して個別の世界を形成していて、商品世界は統一的な世界にならないですね。つまりあらゆる商品が互いに関連しあうことはないのです。現行版の第IV形態では、一般的な価値形態で初めて商品世界が統一的形態になって、一般的な価値形態の等価物が金とかに固定されて、それで金が貨幣になり、それで価格が成立するという形で展開されているのですが、この初本文の第IV形態ではそうはならず、みんなばらばらなわけです。こういうふうになっているということが、実はどういう意味を持つかということですね。

まず、初本文では何故第III形態の次に貨幣形態を導かなかったかという理由について、第III形態の次の形態へのつなぎの文章を確認しておきましょう。

「われわれの現在の立場においては一般的な等価物はまだけっして骨化されていない。どのようにして実際にリンネルは一般的な等価物に転化させられたであろうか？それは、リンネルが自分の価値をまず第一に一つの個別的商品において示し(形態I)、次にはすべての他の商品において順次に相対的に示し(形態II)、こうして逆関係的にすべての他の商品がリンネルにおいて自分たちの価値を相対的に示した(形態III)、ということによってである。単純な相対的な価値表現は、リンネルの一般的な等価形態がそこから発展してきた萌芽だった。この発展のなかでリンネルは役割を終える。……リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる。」(原典、33頁、筑摩書房版、308～9頁)

価値形態論で、一般的な価値形態(第III形態)を論じながら何故そこから貨幣形態へと導かずに、初本文独自の第IV形態を導いたかの説明がなされています。それは第III形態においてリンネルが果たした役割は、どの商品にも当てはまるからでした。このどの商品にも当てはまるということを表示したものが初本文の第IV形態だったのです。そしてこの第IV形態の解説として、次のように述べられています。(諸訳を比較対照して、分かりやすい江夏美千穂訳を引用します。)

「ところが、これらの等式のどれも、逆の関係にされると、一般的な等価物としての上着やコーヒーや茶等々が生じ、したがって、すべての他の商品の一般的な相対的価値形態としての上着やコーヒーや茶等々での価値表現が生ずる。一般的な等価形態は、つねに、すべての他商品に対立して、一商品にのみ属している。だが、それは、すべての他商品に対立して、どの商品にも属している。ところがどの商品もが、自分自身の現物形態を一般的な等価形態として、すべての他商品に対立させるならば、すべての商品が、自分たちをことごとく一般的な等価形態から排除し、したがって、自

分たち自身を、自分たちの価値量の社会的に認められている表示から、排除することになる。

要するに、商品の分析が明らかにしているものは、価値形態のあらゆる本質的な諸規定、および、一般的な相対的価値形態と一般的な等価形態という対立的な諸契機における価値形態そのものであり、そして最後に、単純な相対的価値表現のけっして終結することのない系列——この系列は、最初は、等価形態の発展における一つの過渡段階をなしているが、最後は、一般的な等価物の独自の相対的価値形態に変わる——である。ところが、商品の分析が明らかにしたものは、商品形態一般としてのこれらの諸形態であり、したがって、これらの諸形態は、もし商品Aが一方の形態規定にあれば商品B、C等々は商品Aに対立して他方の形態規定をとるというように、ただ対立的にのみ、どの商品にも属している。しかし、決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値量との内的で必然的な関係を発見する、すなわち、観念的に表現すれば価値形態が価値概念から発生していることを論証する、ということであった。」(『初版資本論』幻燈社、江夏美千穂訳、57～8頁、原典、34頁)

価値形態が価値概念から発生している、という表現の意味については価値概念が、商品世界の統一的な社会的表現を、使用価値と価値という二重物である商品の矛盾の止揚として想定し、この矛盾の展開が、統一的な社会的表現に向けて、簡単な価値形態から順次形態を発展させていったリンネルの役割で、それが、個々の商品にとっては対立的にのみどの商品にも属していることで示されていたわけですから、価値概念自体がこのような矛盾を孕んでいるということでしょう。マルクスはこの価値概念における矛盾の解決として交換過程論を想定していたのです。

4. 交換過程論の課題

この後、交換過程論が続きます。詳しくは、価値形態論があつて、物神性論がはさまって、交換過程論になっています。それで交換過程論の解説に入る前に、久留間鮫造の『価値形態論と交換過程論』での問題提起を取り上げておきましょう。そうすることで、交換過程論の課題が浮き彫りになります。久留間の疑問点は、『資本論』の商品章では貨幣形態を価値形態論のなかで説いているのに、また交換過程で貨幣のことを論じていると。これはなぜかと一生懸命議論しているのですよ。それはね、そもそも文献学的に見てそういう疑問を出すこと自体がおかしいというふうに私は思っています。というのは交換過程論自体、現行版は初版とほとんど変わらないのです。ほとんど変わらない。ということは、この初本文と交換過程論が一つのセットであつてね、現行版と交換過程論をセットにしたら貨幣について二重に論じられることになるというのはね、当たり前の話ですね。そこで、その交換過程論で何が問題にされているかということで、それがその貨幣の生成がどういうふうになされるかということなのです。ですから、現行版では価値形態論で貨幣が出てくるから、だからもうそれは価値形態論で貨幣の生成が説かれている、というふうに、思わされてしまうわけですね。そうじゃなくて初本文の価値形態論では貨幣形態は出てこない。出てこなくて交換過程論で初めて貨幣が出てくるということですから、貨幣がどのように生成されるかということが非常に明快なのです。

そういう意味で私としては、初本文価値形態論の叙述に引き続いて交換過程論を読めば非常に面白い観点が出てくると考えました。商品から貨幣がいかにしてどのようにして生まれたかということが、そこに書かれているのです。先に現行版の価値形

態論のはじめのくだりを引用しましたが、価値表現の発展を貨幣形態までたどることが価値形態論の課題とされています。現行版の価値形態論は貨幣形態まで解いてしまったので、このように述べるのも仕方がないのですが、しかしそうすると交換過程論の独自の意義が忘れられてしまいます。まだ貨幣形態を説いていない初本文の第IV形態とのつながりで交換過程論を読むことで、本当の意味での貨幣生成論が解説されるのです。そしてそうすることで交換過程論の課題が明らかとなり、商品の価値形態の分析と、貨幣そのものの分析の中間に交換過程論が差し込まれている意義が鮮明になるのです。

5. 初本文物神性論における無意識の行為論

交換過程論に入る前に、初本文と現行版の物神性論の違いについて見ておく必要があります。現行版では物神性論は商品の謎的性格の解明に焦点が当てられていて、等価形態の謎性が分析されています。しかし、初本文では、商品の謎的性格の根拠となっている価値形態の秘密に焦点が当てられているのです。この違いの内容は初本文では物象の人格化とそれに伴う人格の物象化について焦点が当てられていることを見ればよいのです。

「それでは、労働生産物が商品の形態をとるとき、その謎のような性格は一体どこからくるのであろうか？

もし人間たちが彼らの諸生産物を、これらの諸物象が同質の人間労働のたんに物象的な外皮として認められるかぎりにおいて、諸価値として相互に関係させるのだとすれば、このことのうちには同時にそれとは逆に、彼らのいろいろな違った労働は、ただ物象的な外皮のなかの同質な人間的労働としてのみ認められているのだ、ということが含まれている。彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に諸価値として関係させるからである。人格的な関係が物象的な形態によって隠されているのである。したがって、この価値の額には、それがなんであるか、は書かれていないのである。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろな違った労働を抽象的な人間労働に等値することを強制されているのである。彼らはそれを知っていない。しかし、彼らは、物質的な物を抽象物たる価値に還元することによって、それを行うのである。これこそは彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた無意識的、本能的な作用なのであって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産が彼らをそのなかに置くところの諸関係とから、必然的に生え出てくるのである。」(岡崎次郎訳『資本論第1巻初版』原典、38頁、筑摩書房版、314～5頁)

価値形態論では、商品が主役で、商品所有者は役割を果たしていませんでした。しかし商品の謎的性格を論じるにあたり、商品の価値形態と人間の思考との関係が論じられてきます。商品が謎的存在であるのは、それが一見して判断できる使用価値という商品の現物形態が、同時に社会的役割を担っているのですが、そして、商品の社会性は人間が役割を果たすことで成立するのですが、その社会性はそれとしては決して意識に昇らないようなものなのです。ですからマルクスは物神性を論じたこの部分で、商品所有者たちの、使用価値物を商品として取り扱うときの行為は、無意識的、本能的な行為となることを証明しています。つまり人々が商品を取り扱うときには、意識的な行為の裏側に、無意識のうちでの本能的行為があるというのです。

6. 交換過程論を読む

交換過程論では、商品所有者たちの行為が取り上げられますが、この物神性論のところでの行為論を踏まえて、冒頭で次のように論じています。引用は現行版からで、初版と違う箇所は<>で示しています。

「諸商品は自身で市場に出かけることができず、また自身で自分たちを交換することができない。だからわれわれは、その保護者たち、すなわち商品所有者たちをさがし求めねばならない。商品は物であり、したがって人間に対しては無抵抗である。それが従順でなければ、人間は暴力を用いること、言いかえれば、それを手ごめにすることができる。これらの物を商品として相互に関連させるためには、商品保護者たちは、自分の意志をこれらの物に宿す人格として<自分たちの意志がこれらの物においてある定在をもつところの諸個人として、・・・(初版の異文)>、相互にふるまわねばならない。かくして、一方の人格は他方の人格の同意をもってのみ、つまりいずれも、両者に共通な意志行為に媒介されてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品をわがものとする。だから彼らは、相互に私有権者として認めあわねばならない。この法的関係は、——その形式は、法律的に発達していてもいなくても契約であるが、——そのうちに経済的關係が反映している意志関係である。この法的関係または意志関係の内容は、経済的關係そのものによって与えられている。<諸人格はここでは、ただ、彼らがなんらかの物象を諸商品として互いに関係させることによるのみ、互いに関係し合うのである。だから、この関係のすべての規定は、商品としての物象の規定のうちに含まれているのである。・・・(初版、現行版では省略されている)>諸人格は、ここではただ、商品の代表者として、したがってまた商品所有者として、相互的にのみ実存する。われわれは、総じて展開の進むにつれて、諸人格の経済的諸扮装は経済的諸関係の人格化に他ならぬのであって、彼らはこうした諸関係の担い手として対応しあうのだということを、見いだすであろう。」(長谷部文雄訳『資本論』原典、90～1頁)

ここでは物神性論で解明された人間の無意識的行為論にもとづいて、物象の人格化と人格の物象化が論じられています。

これもよく分からなかったのですが、この引用文のなかに、商品所有者が商品に意志を宿すというところが出てきます。意志を宿すということがなかなか分からなかったのです。ヘーゲルの所有論でいきますと、ヘーゲルの場合でしたら「人格は、どの物象のなかへも自分の意志を置き入れる」というわけですね。置き入れる。多分これを念頭に置いて、マルクスの交換過程論では「自分の意志をこれらに宿す人格」であるというように初版の記述を書き換えたのです。商品という物に自分の意志を宿しているというふうに言うときに、じゃそういう物に果たして意志を宿せるのかという問題がまた出てきます。ヘーゲルの場合は「置き入れる」わけですから、人間が主体ですよ。マルクスの場合にも、人間が主体だけでも、その意志を宿すということは、物(物象)の思いを人間が代表しなければならぬ。その物の思いというふうなものが果たして成立しているのかということですね。

私はそれに対して、商品というのはある種の概念的な存在だというふうに名づけています。概念的な存在という意味は、結局人間の思考様式に似た、抽象力と判断力とをもった存在という意味ですね。人間の思考というのは物事を分析して抽象して、とことん簡単などころまでいって、それを思考のなかで再度組み立てて総合して、それで概念的に把握して判断をするという、こういう思考による対象の理解の仕方というのが

あるわけですね。デカルトが思考法則としてこれを定式化しています。実は、商品という物象もそういう思考に似たことを行っている。商品自身が他の商品との価値関係のなかで、思考に似たことを行っているのです。彼らが行っているのはどういうことかと言ったら、商品が「考える」と言ったって、人間のように余計なことではなくて、自分の価値がいくらかということ「考えて」いるのです。自分の価値がいくらかということは商品相互の関係のなかで、彼らが決めているわけですね。ですから、人間はその物象に意志を宿すことができる。ああこれは実はいくらだったのだということ、意志宿せば分かるという、こういう形なのです。逆に言ったら、人間は商品の価値を勝手に決めるわけにいかないですね。それはもう市場のなかで決まっています、人間には個別の商品の価格がいくらで決まっているということが分かるのです。つまり、商品の価値関係では諸商品はお互いにその使用価値を抽象しあい、自らの価値がいくらであるかについて判断しあっているのです。(現行版物神性論では、「価値はむしろ、どの労働生産物をも一つの社会的象形文字に転化する。」と述べられていますが、これは価値関係が労働生産物を概念的存在に転化するという意味です。)そしてその分かるということは、結局は物象の関係のなかに自分の意志を宿している。宿して、その言われるがままに実践する。こういうことを交換過程論では述べているということです。

「もっと立ち入って注意してみると、どの商品所有者にとっても、他人の商品はいずれも自分の商品の特殊な等価として意義をもつものであり、したがって、自分の商品は他のすべての商品の一般的な等価としての意義をもつ。だが、すべての商品所有者が同じことをするのだから、どの商品も一般的な等価ではなく、したがってまた諸商品は、それらが価値として等置され価値の大いさとして比較されあうところの、一般的な相対的価値形態をもたない。だからそれらは、総じて、諸商品として対立しあうのではなく、諸生産物または諸使用価値として対立しあうにすぎない。

わが商品所有者たちは当惑して、ファウストのように考える。太初に行為ありき。かくして彼らは、考えるよりも前にすでに行動したのである。商品本性の諸法則が、商品所有者たちの自然本能において自らを実証したのだ。彼らは、彼らの諸商品を一般的な等価としての何らかの他の商品に対立的に連関させることによってのみ、それらを価値として、したがってまた商品として、連関させることができる。このことは商品の分析によって明らかにされた。だが、ある一定の商品を一般的な等価たらしめるものは、社会的行為だけである。だから、他のすべての商品の社会的行動が、それらの商品が自分の価値を全面的に表示するための、ある一定の商品を排除するのである。かようにして、この商品の自然形態が、社会的に妥当な等価形態となる。一般的な等価たるものが、社会的過程によって、その排除された商品の独自の・社会的な機能となる。かくしてその商品は一貨幣となる。『彼らは心をつにして己が能力と権威とを獣にあたう。この徽章をもたぬすべての者に売買することを得ざらしめたり。その徽章は獣の名、もしくはその名の数字なり。』(ヨハネ黙示録)

貨幣結晶は、さまざまな種類の労働生産物がそこで相互に事実的に等置され、したがってまた事実的に商品に転形されるところの、交換過程の必然的な産物である。交換の歴史的な拡大および深化は、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を発展させる。交易のためにこの対立を外的に表示しようとする欲求は、商品価値の自立的形態を追求して、商品と貨幣とへの商品の二重化によってこうした形態が究極的に達成されるまでは、とどまりも休みもしない。かくして、労働生産物の商品

への転形が行われるのと同じ度合いで、商品の貨幣への転形が行われる。」(長谷部訳、原典、92~3頁)

ここで、ゲーテを引きながら述べられている事柄に注目してみましょう。商品所有者たちが、当惑したのは、初版本第IV形態が見えるからでした。商品が概念的存在であり、人がそれに意志を宿せるとしても、初版本の第IV形態を作ってしまったのは一般的、統一的な商品交換は成立しません。でも、普通に考えれば、商品所有者たちは自分が所有している商品で他の商品が買えればそれに越したことはないのですから、商品所有者が自分の頭で考えれば第IV形態に落ち着いてしまいます。

ではなぜ考える前に行動したのでしょうか。商品所有者たちが自分の頭で考える前に行動できたのは、商品に意志を宿しているからでした。ですから一般的等価物を作り出すために、商品所有者たちが自分の商品ではなく、他の一定の商品で自分の商品の価値を表現するという共同行為も、商品に意志を宿したことの帰結として作り出された行為であり、人々はこの行為については自らの頭で考える必要はなかったのです。ですから、貨幣生成の共同行為は、無意識のうちでの本能的共同行為なのです。

つまり、貨幣生成の無意識のうちでの本能的共同行為というのは、一般的等価形態(貨幣形態)にある一定の排除された商品で自分の商品の価値を表現するという、単にそれだけのことです。それだけのことで、それが実は商品所有者にとっては自分の商品の市場価格はいくらと知って、それで値付けをしているという行為の裏面にあるのです。個々の商品所有者にとっては値付けをしているという行為が、実は貨幣を生成する共同行為に各々が参加しているのですが、それは無意識の行為だから意識されない、そういう変な構造というのが貨幣生成論の本質的なところなのです。

具体的に言えば、当事者たちは、自分が作ったスイカに1000円という値段をつけているだけだと思っていますが、自分が作ったものを市場に持って行って価格を付けるという行為自体が、その自分の商品の価値を貨幣商品で表現することであり、そういうことによって貨幣を生成するという共同行為に参加しているという、こういう別の意味を持っているということですね。それはどういうことかと言ったら、この初版本の第IV形態ですね、これは端的に言って20エルレの亜麻布、それから1枚の上着、10ポンドの茶をそれぞれ所有している人々が、自らの所有物で全ての他のものを買いたいという形ですね。つまり、これら個別の商品を所有している人が自分の商品でものを買いたいと思ったときの形というふうにも考えてもらったら非常に分かり易いと思います。先にも述べましたが、商品所有者はみな、自分が作った商品でものを買えたら、それは一番簡単で単純明快じゃないですか。ところがあらゆる商品の所有者たちがそれをやると、みんながみんな自分のものを買いたい、買いたいと言ったらもうまともじゃなくて、それこそ混沌的な、状況になるわけですね。ところが、それじゃうまくいかないから結局、誰もが認めている一定の商品で自分らの商品の価値を表現するという、そういう共同行為をすればそこに貨幣が生成できる。ただしこれは自分の頭で考えたことではなくて、無意識のうちでの本能的共同行為だということなのです。

7. ソ連崩壊の原理的根拠

前回のソ連崩壊の歴史的経過と評価を踏まえ、今回の初版本価値形態論と物神性論、そして交換過程論を解説して、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって商品から貨幣が生成されているということが判明すれば、この行為は毎日

毎時間なされているわけですから、商品からの貨幣の生成は毎日毎時間なされているということが分かります。このことが分かれば、商品・貨幣の廃絶という問題も、無意識のうちでの本能的共同行為を必要とはしない経済的関係を迂回して形成していくという課題が見えてきます。そしてソ連の経験は、この無意識のうちでの本能的共同行為を、政治権力や法律的規制や行政的方法で廃絶しようとしてできなかったということとして、整理することができます。

後記

とうとう、本誌発行も20年目になりました。今は激動の時代で感慨にふける時ではありませんが、これまで考えてきたことが、社会運動の展開に少しでも役立つことができると思っています。そうしたなかで、大阪自由大学準備会の『資本論』講座を担当することになり、準備を始めています。講座も97年から政治・文化講座として、数年間続けましたが、以前とは違った社会的・経済的環境のなかで、講座を開講できることはまた違った気分です。ソ連崩壊と『資本論』のテーマは、2月5日の社会主義理論学会での報告をもとに、そこで話したことを補充して作成してみました。補充していく過程で、問題提起は『価値形態・物象化・物神性』でなされているものの、理解される形にはなっていないという感想をもちました。今回はその辺のところに気をつけて補充してみました。

次のテーマの物象化については、立て続けにその解明を課題とした書籍、ホネット『物象化』(法政大学出版局)、佐々木隆治『マルクスの物象化論』(社会評論社)、山本哲士『物象化と資本パワー』(文化科学高等研究院出版局)などが出たので、もう一度勉強しなおしたいと思っています。経済危機については信用論のまとめをつけてみたい、・・・というように夢は広がっていますが、あまり枠を広げない方がいいかもしれません。

マルクスや共産主義や『資本論』がこれほど脚光を浴びる時代になるとはあまり予想してはいなかったのですが、資本主義の世界的危機の進行に解決のめどがない、ということの現れでしょう。ハーヴェイの『資本の謎』(作品社)は、現在における共産主義運動の可能性を追求した好著で、これについての補足を行ってみました。受け入れられるでしょうか。あと、岩田弘さんが亡くなって、急遽追悼文を書きましたが、岩田さんの著作はほとんど読んではいなかったため、見当はずれがあるかもしれません。

今回は何もふれられませんでした。脱原発の運動はいよいよ正念場に入っています。生協での運動作りがとりあえずの責任ですが、自治の観点から様々な活動のまとめをつけていきたい。あと、商品・貨幣廃絶に向けた迂回作戦ですが、高視で新たに若者たちの間でワーカーズ・コレクティブ作りが課題となっています。そのほか、社会的事業所法制化運動や、国際協同組合年の取組みなどにもふれることができている。また、ルネサンス研究所の活動もあるのですが、これも報告できていません。

いろいろ課題はあるのですが、私としては、共産主義運動の基本に立ち返って、現時点で必要な理論的・思想的な問題の解明に集中していきたい。資本論講座の開講はこの活動にとっての願ってもない環境となっています。一般向けの提起に具体化していきたいので、ご意見など寄せていただければ幸いです。